

研究テーマ  
「児童が困っているときに自分から発信できる力をつけ  
ていくための支援」

1

### 本実践に関連する児童生徒の実態

対象児童生徒 小学校第2学年

○課題  
・自分から誰かに声をかけて手伝ってもらったり助けてもらったりすることが少ない。(今後さらに必要になるであろう力)  
・言われたことはがんばるが、自ら気付いて行動することが少ない。

○強み  
・学級の友達がA児のことをよく理解しており、自主的に手伝いや声かけをしてくれることが多いので、日常生活において、特に困ることはない。  
・気持ちの切り替えが早く、プラス思考である。  
・明るく、前向きで、自己肯定感が高い。

2

### 指導目標・指導仮説

教科等及び単元(題材)名  
学級活動「こんなとき どうする？」

目標(本実践終了時の期待する子供の姿)  
手伝ってもらいたいことや助けてもらいたいことを、自分から頼むことができる。

指導仮説  
自分が困っている状況を把握し、どうすれば解決できるかを知ること、指示や助けを待つことが減るであろう。

児童生徒の実態

3

### 指導・評価の計画

◆表1 指導・評価の計画

	主な学習活動	目標	評価方法
1次	困っているという状況を本人が把握する。	○困っていることを自覚することができる。	・行動観察(担任・支援員等)
2次	自分の気持ちを伝える練習をする。(ソーシャルスキル)	○上手なお願いの仕方について知る。 ○困っている人に気づき、声をかける方法を知る。	・ワークシート ・発言 ・行動観察
3次	実践し、振り返る。	○授業等で身に付けたスキルを、学校生活で使い、困ったときに自分から発信することができる。	・行動観察(担任・支援員等)

◆表2 実践前後の変容の評価

評価内容	評価方法
実践前後での行動の様子	行動観察による記録

4

### 指導の実際①

座席配置で、あえてA児が「困る」状況を経験させる

座席を最前列から最後尾列へ

最前列にいたときの長所  
・指導者の目が行き届き、細かなつまずきに対応できる。  
・すぐに対応、声かけ、支援ができる。

最前列にいたときの短所  
・指導者が先回りの支援をしよう。  
・A児の自主性・主体性が発揮されにくい。

気をつけること  
・見守ることを大切にした支援をする。  
・教室内の動線づくり(車いす移動)に配慮し、ある程度スムーズに動ける場所を常に確保する。

5

### 指導の実際②

困ったときにどうすればよいか分かる(見える化)



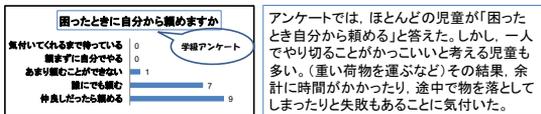
A児と話し合っ、A児の机に困ったときにどうすればよいかを書いて貼る。より具体的な言葉にして貼る。自分から言えるようになったらはがしていくということを約束とする。

「おーい!」うちわ  
「おーい!」と、うちわを振って、誰にでも気軽に頼めるように、机の横にうちわをかけておく。

6

### 指導の実際③

クラス全体の人間関係力向上に向けて  
(ソーシャルスキルトレーニング)



アンケートでは、ほとんどの児童が「困ったとき自分から頼める」と答えた。しかし、一人でやり切ることがかかると考える児童も多い。(重い荷物を運ぶなど)その結果、余計に時間がかかったり、途中で物を落としてしまったりと失敗もあることに気付いた。

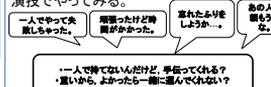
#### 「困っている人を助けよう」

困っている人にどんなふうに声をかければいかな。



#### 「じゃあ、あなたに頼みましょう」

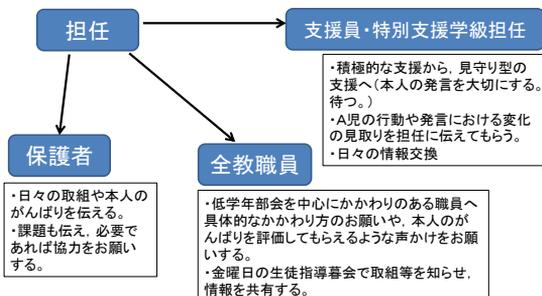
一人でできないときはどうしたらよいかを役割演技でやってみる。



※A児だけでなくクラス全員に必要な力として身に付けさせる

### 指導の実際④

それぞれの立場から、複数でのアプローチ



### 学習過程の評価

学習活動	児童生徒の状況	達成状況
1 困っているという状況を把握する。	一人で機を動かすことが難しいことや、車いすの乗り換えの手伝いが必要であることは把握できた。自分から発信する時と、時間がかかっても一人でやろうとしたり、(待っていて)やらなかったりという時がある。	○
2 自分の気持ちを伝える練習をする。	「誰か、〇〇を手伝って。」と具体的に状況を説明しながら発信することができた。 困っている人に進んで声をかけることができた。	◎
3 実践し、振り返る。	困っている状況で自分から発信することが数回あった。その都度、「よく言えたね」と伝えハイタッチをしている。大変嬉しそうに車いすで飛び跳ねたり「よっしゃあ。」という声が出たりしている。	○

### 実践前後での児童生徒の変容

実践前	実践後
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分から誰かに声をかけて手伝ってもらったり助けてもらったりということが少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>車いすの乗り換え時に、担任に自分からお願ひすることができた。(1回)</li> <li>物が落ちた時に、担任に自分からお願ひすることができた。(1回)</li> <li>机が動かさなかった時に、友達に自分から声をかけることができた。(2回)</li> <li>宿題ができていないことについて自分から担任に伝えることができた。(1回)</li> <li>指導者が待つことで、困っていることを自分から言うことができた。(特学担任より)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>言われたことはがんばるが、自ら気付けて行動することが少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日直が健康観察簿を取りに行くのを忘れていたことに気づき、教えてあげていた。友達のことにも関心が向けられるようになっていた。(支援員より)</li> </ul>

### 指導仮説の検証

●児童生徒は目標を達成したか。  
●概ね達成した。  
●判断の理由・根拠  
・これまで、困った状況でも、自分からほとんど発信しなかったが、学んだことを生かし、困ったときには自分から発信できるようになってきた。

●指導の工夫は有効であったか  
・有効であった。  
●判断の理由・根拠  
・こんな時に自分は困っているということを認識することができた。  
・クラスの友達から「自分で言えてすごいね。」という声をかけられていた。  
・友達に頼んでいないときも、助けてもらったときには「ありがとう」と大きな声で言えるようになってきた。

### 指導の改善案

成果(よかった点)	課題(改善が必要な点)
<ul style="list-style-type: none"> <li>困った時に伝える言葉を児童と話し合い、その言葉を机に貼ったことは、児童の助けになっていた。</li> <li>学級全体としてソーシャルスキルに取り組んだことが、個人の支援の後押しとなった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>机に貼った言葉が、適切な内容か、他に言い方はないかなど、児童に考えさせること。</li> <li>いつでも、誰にでも自ら発信できるように、発信したよさを児童自身が実感でき「助かった」、「解決できた」と思える経験を積むこと。</li> </ul>

成果・課題を踏まえた改善案  
・机に貼った内容がマンネリ化しないように、児童の今の課題に対応した内容に変えていき、活用できるようにする。  
・学級全体で取り組めること(学活「全員が楽しめるおたのしみ会をしよう」など)を考え、実践することを通して、集団への依頼の仕方、場面などの経験を積ませる。